

## 会 議 記 録

会議名称	第1回社会教育委員の会議
日 時	令和2年6月29日(月)午後3時30分～午後5時19分
場 所	分庁舎4階 会議室A・B
出席者	委員 山口、小澤、朝枝、南、檜枝、赤池、天野、笹井 区側 教育長、生涯学習担当部長(中央図書館長、中央図書館次長)、 生涯学習推進課長、学校支援課長、 生涯学習推進課長代理(管理係長)、 社会教育推進担当係長(社会教育主事)、 教育連携担当係長(社会教育センター社会教育主事)
配付資料	<事前配布資料> 資料1 第6回社会教育委員の会議 会議記録(案) 資料2 社会教育関係団体に対する補助金交付について <席上配布資料>※=委員のみ 1 教育委員会委員・管理職等一覧 2 杉並区立学校等一覧(事務連絡用) 3 今後の検討課題(質問票、意見書) 4 区事業における新型コロナウイルス感染症への当面の対応について(第8報) 5 杉並区教育委員会公式チャンネル 6 すぎなみ大人塾2019記録集※ 7 すぎなみ教育シンポジウム2019開催報告※ 8 すぎキャン vol.6
会議次第	○新任委員委嘱、教育長挨拶、各委員自己紹介 開会 ○協議事項 1 社会教育関係団体への補助金支出について 2 今後の検討課題について 3 その他 閉会

## (意見要旨)

○社会教育推進担当係長（社会教育主事） 開会に先立ち、新たな委員の委嘱と人事異動の報告、白石教育長が就任されてはじめての機会であるので自己紹介等をさせていただく。

（新任委員委嘱、教育長挨拶、各委員自己紹介）

○議 長 では、今年度第1回社会教育委員の会議を始める。今日の議題として、社会教育法で定められている必須の手続きである、社会教育関係団体に対する補助金支出についてから始める。

○社会教育推進担当係長（社会教育主事） 今回は、この度の新型コロナウイルス感染症防止対策として、関係者の同席を求めずに実施する方法等とした。このため、皆様方にはあらかじめ資料をご覧いただき、ご質問いただくなどのご協力を得ながら行う形にした。

補助金交付の目的は、社会教育関係団体の自主性を高め活動活性化に資することで、団体の運営に必要な経費を補助の対象にしている。交付団体は、杉並区小学校PTA連合協議会、杉並区立中学校PTA協議会、杉並区学校開放連合協議会、杉並区文化団体連合会であり、補助金額は毎年度予算に定める額で、本年度分は一覧表でご確認いただきたい。

この間、新型コロナウイルス感染症に対応しながらそれぞれの団体が運営にあたってきているが、小学校PTAはオンラインで総会を、中学校PTAの場合は、6月に延期して集まる範囲を限定して総会を開いている。学校開放連合協議会も集まるのが難しく、学校の運営がままならない中で施設開放はあり得ない状況が続き見通しが立たなかったが、ようやく学校も少しずつ日常を戻してリスタートする段階に入り、書面等でのやり取りで総会形式を整えている。文化団体連合会は高齢の方が多く、集まることも困難なため書面による総会を行った。今後の事業計画に関し、コロナウイルスの第2波、第3波なども心配され、従来どおりの活動は難しいため、今後の事業のありようを検討中とのことである。

○議 長 ご質問等いかがか。

○委 員 コロナで活動に制限がある中で、例年の金額を支出するのか。

○教育連携担当係長 会って議論できない状況での引き継ぎになったが、例えばWi-Fiの環境を設定し、オンラインで会議や研修をするなど、減額するより現状維持で新しい役員、委員が協議しながら有効に使う形で引き継がれたと聞いている。

○委 員 事業をやれば経費がかかる。例年どおりの予算を確保した上で、決算で調整すればいいと思う。

○議 長 ほかに意見はないか。事前に資料で内容を見ていただいたので、なければ今回の補助金支出は差し支えないという意見でまとめたと思うがいかがか。

## (了承)

○議 長 では、協議事項の2番目、今後の検討課題について。

○社会教育推進担当係長（社会教育主事） 今まで「3密」で進めてきた社会教育の推進が困難になり、コロナ禍でどう展開することが望ましいか委員の皆様からご意見をいただきたい。

本日欠席の委員からは、オンラインで美術教育をしているが、学生の出席率も高く成果も出ていて、強みの一つである物理的な距離の制約がない

ことでフランス、オーストリアからの講義があったり、今後もアメリカ等から参加をいただいたりする予定がある。「オンラインだから可能になったことにチャレンジして、新型コロナウイルスによって変容していく様々なことをポジティブに捉えて未来を構築していけたらと考えている」との意見だった。

では、社会教育や個人の社会的な活動、ボランティアはどうなっていくのだろうか。

○委員 大学では、通常の面接や説明会がウェブ方式になりグループ面接を含めて全てネット上で完結させたりして、学生が変わっていく環境に追いついていくのが精一杯な状況だった。研究面では、ドクターをめざす院生の研究論文も学会がストップして実績ができない状態で心配したりした。大学によってネット環境が全然違っているが、回線が混雑し過ぎてしまう状況下で必死にやっている感じがした。こうした中で精神的に不安定になっている学生には、個別に対応していくことになるのだが、そのフォローの大変さに大学側が理解していないという問題があるように思った。

しかし、学生にとって、今までは紙とかウェブでしか見られなかったものが手元に資料として届くとか、繰り返し自分で再生できて理解ができるとか、もしかすれば到達度のようなことに関しては通常授業よりも良かったこともあるように思っている。

○委員 社会教育にIT環境は欠かせない。テレワークの問題は、会社側と個人だけの問題ではなく、地域としてどう考えるか。家庭介入の問題を考慮し、家庭内の課題をいかにクリアしていけるか、サポートができる体制をどうつくっていくか、地域として考えていかななくてはならないと思う。報道が日々変わって踊らされて振り回されている感じの時に、何が大事かということを考える重要な視点が全体に欠けがちになる。情報を追っただけだと欠けてしまいがちな、社会全体の中で何を重点に置くか、何を一番重視するかとかを考えることが、社会を支援する側の視点として必要ではないかと強く思った。

○委員 私もオンライン会議や授業は、大きなメリットがあると思う。デメリットもあるが、直接会えない状況でオンラインの活用は必須だ。離れている孫とテレビ会議のため利用しはじめたZoomだが、とても簡単で、セミナーでも地理的距離が問題にならず、今まで参加のなかった遠方の人も入って来られて非常によかった。コロナ禍で気がついたことは、リアルな人と人との接触が駄目になった場合、生き残った関係というのは、オンライン。それからもう一つは徒歩圏で5分～10分の範囲にある自然発生的な人間関係で、これは発見だったと思う。

先日、差別解消地域会議に出席し、障害者の方は人の手を借りて誘導してもらったり、物の場所を確認したり、手で触るだけではなく体全体の感覚を使って体感して生活していて、顔も周囲の状況をキャッチするアンテナの一つだが、マスクで顔が覆われるとその感覚が鈍り、コロナで接触がいけないといった途端に全く支援をしてもらえなくなったという。やはり弱いところに大きな課題を引き起こしているのだから、コロナがある程度収まったら、ここに本気で取り組んで変えていかなければと思っている。

○議長 オンライン教育について学校の先生は、どう受け止めたのか。

○委員 子どもが休校中にどのように変化しているか。画面の中で見る部

分と、実際に会う部分というのは違うだろう。これがもっと進んでくるとなると、5年、10年、30年先の教育を想定して考え、準備をしていかないとならない。初めての経験なので、先の部分について、想定値が全然自分の中に入らないのが、つらい。

- 議長 中学校では、オンラインで子供たちへの教育しているのか。
- 委員 まだできていない。家庭で実際に見られる大画面の機器がまだ少なく、発信する場合も長時間使用できる保証がなく、どう整備していくか、授業はどうつくっていくか、勉強を始めたところだ。
- 議長 小学校の状況はどうか。
- 委員 端末がない家庭には、学校のタブレット端末を貸す。臨時休業時に顔を合わせて、ホームルームができることが最初の目標だと説明があった。頻繁に電話をして直接話をする、はがきを出し合うなどつながりを絶やさないことが必要だ。  
また、今年中止になったことはたくさんあるが、来年できるから今年も中止も仕方ないと考えるのか、今後も実施しないと考えるのかによって、大きく違う。
- 議長 学校教育は計画的で、今年はこちらまで、来年はこちらまで進めるという暗黙の前提になっている。目途が立たなくなるのは決定的な問題になってくる。ほかに意見はあるか。
- 委員 Wi-Fiの事情や経済的課題が出てきている。オンライン環境が整った諸外国でも、裕福な家庭の場合だけでなく、地域によって貧富の差があり、それが分かるツールになり得るリスクがある。  
先日、保護者と済美教育センターの教育長付主任研究員による座談会をしたのだが、問い、考え続ける、対話をするということが大事だと感じた。先生方が全部教室を消毒し、ならば保護者はどうするかといった時に、とあるPTAが清掃ボランティアを始めることにしたという。話し合っただけで決定せざるを得ないことはいろいろ出てくるであろうが、その場が社会教育ではないか。
- 委員 コロナで家から出られないという子が意外といた。怖くなったり不安になったりする子が今も継続して一定数いるのではないか。中には、親が不安で子どもを行かせたくないということもあるだろうが、養護の先生にお話をうかがって、どのように親も心構えをすればいいのか、情報を提供していきたいと思う。
- 委員 0・1・2・3歳向け講座のウェブでの作成依頼があり、赤ちゃん人形を使って、自己肯定感を育むコミュニケーション動画を作って配信した。母親が外出できない中、わざわざ講座に出かけずにスマホやパソコンで参加できるのがオンラインの良さだ。チャットで質問と回答もでき、気軽に参加できるメリットがある。娘も留学先でオンライン授業になり、兄弟・姉妹もオンラインの授業で、それぞれが部屋で受けていて、両親もオンラインで仕事をしていて、家族の姿が映り込むようなことでも平気で、まるで同級生のような感じだと言っていた。  
生活の中に仕事があり、仕事の中に生活があり、生活の中に授業、学びがあることを、当たり前のように受け入れている姿が、娘には新鮮なようだ。今までは、ワークとライフを分けて議論がされてきた。今回、コロナでワークとライフは意外と同じではないか。生活の中で不安に思ったり課

題に思ったり悩んだりしていることを解決するために仕事があるのに、切り離してしまっていた時代を過ごしてきた。次の仕事を生み出していけることが、このコロナの中でたくさんヒントがあったのではないかと感じた。

○議長 ワークとライフがクロスして重なっている部分があり壁がなくなっているという指摘はとても面白い。あわせて、パブリックなこととプライベートなことがクロスオーバーしてきていることもあるように思いながらお話をうかがった。

○委員 目が不自由な方が困っていて、誰かが手助けを得られなくてはいけないうちに、個人としてどう考え、どう手を差し伸べなくてはいけないうかを考えていた。結論は出ないのだが、対面でできないからこそ悩んだり、実際に困ったりしていると思う。

○委員 子どもの実験遊びや簡単にお家でできるものを撮って、まだアップはしていないが、動画を一緒に撮りながら試みているのが楽しみながらできるということも、進歩かなと思う。

○議長 マズローの欲求の5段階説で、心理のモデルが生理的欲求、安全の欲求、帰属欲求、承認欲求、さらに自己実現欲求と五つの段階があるが、以前の社会教育というのは、自己実現の活動だという考え方がメジャーであったが、今は、居場所の問題とか、どうしたら帰属できる場をつくれるのか、みんなが社会的に帰属してもらおうのか、どうしたらお互いに承認欲求を満たして自己肯定感を持ってもらうのかということも、社会教育のターゲットになっている。そう考えると、特に子どもとか中高生の場合は、帰属ができないと自立もできなくなってしまうのでどうすればいいのか。居場所は どうやってオンラインにできるのかというのは確かにあって、今後の社会教育の大きな課題だろうと思っている。

○委員 学校に行けない不登校の子どもたちが、オンラインでつながってから、みんな同じ状況で奇異な目で見られなくなりいい方向に行っているという。ネットの社会でもそういうことが当たり前自由に発言できるネットワークがあれば、一つの居場所になる。

○委員 長く家にステイして、はじめは女性ばかりが子どもの教育も面倒も見ていて、仕事もして家事もしてと、悲鳴のような相談が来ていたのだが、ある時から家族が仲良くなったという声が8割ぐらいになった。夫が子どもたちの成長を見られ、こんなに長く一緒にいるのは初めてで、子どもたちがこうやって生活していて、妻がこんなに大変でということを目の当たりにした。それが、家族と一緒にいて、子どもとしゃべったりお風呂に入ったりご飯を一緒に作ったり、自由に仕事と家庭をやるようになり、子どもたちにとっても良かったという声があった。

○委員 役割が変わりつつあるというところに関して、奇しくも家庭が介在する環境の中で働くとか、介在する関係の中で子育てするということがなくなったときに、変わることが前提となって変質させていくことが大事だと思う。

○議長 なるほど。ありがとうございます。他になければ本日は終えたいと思う。どうもありがとうございました。